

## ダラス日本語補習授業校の子どもたち

梶 田 正 巳      杉 村 伸一郎<sup>1)</sup>

### はじめに

筆者は1999年1月8日から1月17日までの間、テキサス州にあるダラス日本語補習授業校（友愛学園）に通う日本人子女を対象に、彼らの現状を理解するための現地調査を行った。調査は、保護者および児童・生徒を対象に実施した質問紙調査に加えて、補習校、現地校の訪問や、児童・生徒の自宅へホームステイをさせていただくことにより、子どもたち、補習校および現地校の教師、保護者を対象にした面接調査を行った。以下では、まず補習校と現地校の状況を報告し、次に、言語、学力、アイデンティティの順に、質問紙調査と面接調査、学校要覧や文集などの資料を通して明らかになったことを報告する。なお、以下の文中では、子どもや保護者の発言または記述を「 」で囲み、筆者の記述と区別した。

### 補習校

ダラスは、テキサス州北東部に位置し、ジョン・F. ケネディ大統領が凶弾に倒れたところとして有名である。人口は約110万人で、在留邦人は約2,000名である。日本企業は120社以上と言われており、その子女の多くが補習校に通っている。

沿革 ダラス日本語補習授業校は、1970年にダラス日本語補習教室として発足し、当初の生徒は小学部だけの15名であった。1983年にダラス日本人会の下部機構である教育部会として位置づけられると同時に、テキサス州公益法人として認可され、1984年に文部省から初代派遣教員が校長として着任した。現在も政府派遣教員は1名であるが、生徒数は、幼稚部54名、小学部159名、中学部37名、高等部26名で全体で280名弱である（1999年1月現在）。校舎は、Frankfordにある現地校のDan F. Long Middle Schoolを借用し、運営は日本人会の会員より選出された委員と学校長により行われている。

クラスと時間割 授業は毎週土曜日に午前8時30分から始まり、下校時間は、幼稚部が12時40分、小学部、中

学部、高等部は3時10分である。学期は日本と同じで、年間授業日数は43日である。小学部は1学年2クラスから構成され、1クラスの人数は10名から20名である。1、2年生は国語3時間、算数2時間、生活1時間、3年生から6年生は国語3時間、算数2時間、社会1時間の授業が行われている。中学部は各学年12名から13名の1クラスで、国語3時間、数学2時間、社会1時間の授業が行われている。高等部は高1が8名の1クラスで、国語2時間、数学2時間、小論文2時間、高2と高3は合同のクラスで、国語、数学、小論文が各2時間、選択科目として開講されている。

補習校に求めるもの 時間割からわかるように、補習校の目的は、子どもたちが将来帰国した際に日本の教育にスムーズに移行できるように、日本語および日本の教科書による補習教育を行うことである。しかし、補習校は土曜日のみの週1日であり、月曜日から金曜日は子どもは現地校に通っている。そこで、多くの子どもにとって、補習校の学習と現地校の学習をどう両立させるかということが問題になる。ある子どもは文集に次のように書いている。「みんなは毎週補習校に通っているけれど、なんのためにきているのだろう。私ははっきり言って、友達に会うためだけにきている。小さい時は、補習校がいやでたまらなくて、なんで毎週土曜日、現地校の友達はおそくまで寝ているのに私だけ朝早く起きて難しい漢字を習いにいかないといけないのか、といつも思っていた」

中には悩んだ末、補習校をやめてしまった子どももいる。「補習校というのは、普通の現地校プラス補習校ですよね。そしてそこで勉強しても、補習校でいくらグレードがよくても、現地校には関係ないし、すごくいつも疲れているから、やすらぎが欲しいという意味で、みんな友達をつくるために、最初は行くんですね。で最初は楽しいんですけど、だんだん慣れてくると、やっぱり何のために行ってるのかって（中略）将来、たしかに、自分が日本の大学に行くときにとっては大切かもしれないけれども、そのときは大変で、やっぱりやりたくなくて、現地校の方を重視したいと思ったので、やめて、土曜日でも有意義に使えるように、普通の現地校の宿題をやっ

1) 神戸女子大学文学部助教授。

本論文は同氏の執筆によるものである。

たりしようと思ってやめたのがきっかけです」

先に補習校の学習と現地校の学習の両立が問題であると書いたが、この2人の発言に、友達という言葉が共通して現れたことからわかるように、補習校に通う目的は学習というより友達であるという子どもが多い。一方、外から見ている保護者は学習に力を入れてほしいようである。保護者に実施した質問紙では以下のような意見が寄せられた。「補習校は現地校でのストレス発散の場になっているくらいがあり、本来の勉強の場という側面を回復すべきと考えます」、「補習校は日本から来た子どもたちの社交場、リクレーションセンターみたいな感じで、現地校でのストレスを発散できる場所と間違った考えで通っている子どもが多くいる。保護者もそれを黙認。補習校にあまり期待していない方がほとんど。それなら、日本の学校教育をそのまま補習校にもってくるのではなく、アメリカの補習校での学習のやり方があると思う」

以上の問題をさらに複雑にしているのは、日本語能力、学力、滞在期間などの様々な個人差である。例えば、帰国する予定がない子どもは次のように述べている。「私が補習校の勉強に力を入れないのは、私は多分日本に住まないから言葉が話せたら、それで十分と思っているからだと思う」。このように、帰国か永住か、帰国する場合も後何年滞在するのか、により補習校での目的が変わるのである。そこで、保護者からは、「国語ではなく、海外で幼い頃から住み日本語を学ぶ子どもたちや長く海外で過ごし日本に帰国する子どもたちが日本語を勉強できるクラスがほしい」、「永住者の子どもたちが日本語を嫌がらず気楽に学べるクラスがあるとよい」、「習熟度別、学力別クラスにしてほしい」というような要望が上がっている。しかし次に述べるように、予算や人材の確保の問題があり、実現は難しいようである。

**運営** 筆者が訪問した年度には企業の事情により多くの駐在員が帰国したため、ダラス在住の日本人家庭数は減少の一途をたどり、日本人補習校でも1998年4月で420名だった生徒数が年末には280名と大幅に減少していた。そのため学費収入が減少し、さらにインフレに伴う校舎賃貸料を含む学校運営に関する諸経費の上昇が問題になっていた。そこで対策の一つとして、買い物総額の1～5%が補習校に払い戻されるという、地元食料品スーパーが非営利団体に向けて提供している資金援助プログラムの利用を始めていた。

運営面では、クラス当番や学校当番などが保護者にとって負担となっているようであった。クラス当番は、借用している現地校より、教室内の物が触られたり、無くなったりしている等の苦情があり、その対策として行われているもので、教師が教室を空ける時に、子どもが教室の

物に触らないか等を監視したりする。自前の校舎を持っていない苦労は授業場面でもみられ、現地校の先生が黒板に書いた状態を保つために、黒板の一部だけしか授業で使えないクラスもあった。このように校舎の借用に伴う問題はあがあるが、その一方で、「補習校は親の情報交換の場です」と積極的に受けとめている保護者もいた。

補習校では、日本語をとおした学力を身につけるだけでなく、日本文化の保持、修得も重要な目的となる。そのため、運動会などの行事があり、筆者が訪問した時も書き初めが行われていた。また、現地校の学校生活と区別し補習校独自の約束を守らせるという指導が行われている。日本的な生活習慣を育成するという点に関しては、保護者の考えは分かれるようで、運動会などの意義をあまり認めない保護者がいる一方で、「補習校で、先生の授業態度、話し言葉などがかなりアメリカナイズされているので、できる限り日本の小学校に近い状況でやってほしい」という意見も聞かれた。

**渡米と帰国** 最後に、渡米と帰国に関する保護者の意見をまとめておく。渡米時に役立ったものとして、海外子女教育振興財団の教育相談、会社が発行する海外赴任者用マニュアル、ダラス日本人会が発行している「ダラスに暮らす」、地元の教育委員会がインターネット上で公開している情報などがあげられていた。事前の情報に関しては、「ダラスに関する情報が不足していた」という声がある一方で、「これから渡航される方は、あまり不安な気持ちにさせる情報などに左右されず、現地の生活をしっかり見つめ楽しんでほしい」という声もあった。帰国後のことに関しては、「日本での受け入れをフレキシブルに」、「新学期4月変わらないか」、「受験の時期をもっとフレキシブルにして、アメリカで高校を終えて大学に行く場合、学年を下げなくてよいようにしてほしい」など、受け入れ校の充実、編入学の資格や条件の緩和、試験の機会の増加に関する要望が多かった。

## 現地校

**学校区** 米国では学年制や教育内容は全国一律でなく学校区ごとに決められており、テキサス州では学校区はI.S.D. (Independent School District) とよばれている。保護者が生活上の安全性や教育レベルの高さなどを考慮し居住地を決めるので、日本人の子女は特定の学校区に集まる傾向があり、ダラスでは、Plano, Richardson, Coppell, そして、補習校があるCarrollton-Farmers Branchという学校区に日本人子女が多く通学している。とはいっても、邦人家庭が散在しているため、1校あたりの人数は、1～2名が大半で多い学校でも5～6名である。主な学校区について

の学年制やESLの教育事情に関しては、先述した「ダラスに暮らす」に詳しいので紙幅の都合上割愛し、本報告では、生徒、教師、保護者に対して行った質問紙や面接の結果を中心に筆者が見聞したことを加え、現地校での子どもの様子や状況について述べることにする。

**入学時の印象** 補習校も日本の学校とは異なっていたが、現地校はさらに大きく異なる。子どもたちはその違いをどのように受けとめているのだろうか。「私はこっちの、楽しみながら勉強するという方法が、とてもいいと思います。でも、いいことばかりじゃありません。まず、初めの日、わたしが困ったのは、クラスが授業ごとにかわるので、給食時間、英語のクラスからもどってくると、私の席に他の子がすわっていて、一ヶ月ぐらい、わたしはとなりの、コンピュータの席で、給食を食べていました。また、給食も、おいしいときもあるけど、気に入るメニューがないと、ハンバーガーが一個だったりします。そのときは、つくづく日本の給食のおばちゃんが苦労して、いろいろ考えて作っているんだなあ、と思いました」

この小学5年生の作文にみられるように、多くの子どもが指摘するのは、指導方法の違い、クラスが固定されていないこと、食事に関することである。「クラス自体にスケジュールがあるのではなく、一人一人にスケジュールがあるから、すごくそれにびっくりして、あー、ひとりで動くんだって」、このように固定されたクラスがないことには、誰もが最初はどまどうようである。しかし、「毎回クラスが変わり、休み時間が短い」、「単位制で自身で考えて単位を決める」ということには、比較的早く適応し、「自分の好きな教科を自由に選べ、好きなものに集中できる」ことを「素晴らしいことだと思う」というように変化していくようであった。また、おやつや食事に関しても、「おかしを食べてよい」、「スナックタイムがある」、「私語は注意されるが、お菓子を食べていても、歩き回ったりしても注意されない」、「学校でランチを買う」、「日本は残さずごはんを食べないといけないのに、アメリカは平気でごはんを捨ててもよい」といったことに渡米直後は驚いたということであった。通学に関しても、小学生は、「一人で歩いていけないことにびっくりした」といい、高校生は、「15歳で仮免、16から一人で運転できる。アメリカに来てよかったと思う。ランチタイムは車に関する話題。車の有無で生活が変わる」と語っていた。このように、車社会ということと体育の授業の性質が日本と異なることもあり、「体を動かす機会減ったので運動能力が低下した」と感じていた子どもが何人かいた。

**指導方法** 指導方法では、小学生が「できるとキャン

ディーをもらえた」、中学生が「コンテストとかいっぱいあって、賞とかもらうとやる気になる」、高校生が「こっちきて2年ぐらいしかたっていないのに、ここまでできてすごいね、って後で個人的に話をしてくれるから、それでエッセイとかやっているときは、やりたくないと思うけど、ほめられると調子に乗って、次もがんばろうって」というように、ほめて伸ばすということが異口同音に語られた。これに関連して、「アメリカでは勉強ができればHonors, Highまたはgradeをskipしたりできる」、「出来る子はいくらでも伸ばせる」、「レベル別の授業が普通に行われている」ということも、子どもたちは肯定的に受けとめていた。積極的にほめる一方で、厳しい面もあり、注意のカードが数回分たまると、detentionといって、監視付きのクラスで勉強させられるということであった。

また、「アメリカの学校の方が自由で楽しい」、という感想が多く聞かれた。例えば、アートの授業では、「日本だったら、かき方とか決まっていて、それが違ったら、かきなおしてこい、かきなおしてこい、といわれて、先生が満足するまで、同じのを何回もするんですけど、こっちだったら、自分でトピック選べるし、自由にかけろし、かく量もたくさんあるから、毎日あるし、おもしろい」ということであった。「アメリカの学校は楽しいことが基本」といった小学生も、その理由として、プロジェクトをあげ、日本では、グループで調べることが多いのに、こちらでは、一人で調べることが多く、しかも、コンピュータやインターネットを自由に使える、と教えてくれた。しかし子どもたちは、アメリカの指導方法が全面的に日本よりもよいと考えているわけではない。多くの子どもは、「積極的にすれば先生も応じてくれる」、「やりたいと思う人には手をさしのべる」という点を評価している半面、「聞くと教えてくれるが、そうでないと指導しない」、「ほっとかれているという意味でさびしい」、「教師が冷たく察することをしない」と感じている。

**友人関係** 現地校での友人関係に関しては、「気軽に声をかけてくれる、なじみやすい」、「自由で親切」、「あいさつや感謝の言葉が日本より多い」と好意的な感想がある一方で、「人種的な偏見を感じる」、「積極的に話さないと友達ができない」という子どももあり、質問紙に対する保護者の回答には、「子どもが一所懸命英語を話そうとしているのに、心ない現地校の子達が耳を貸さなかったり、こそこそ話をしたり、笑ったりするので、ずいぶんと傷ついたと思う」という記述もあった。「すごいいい友達になる人は、なんかのきっかけで日本とつながっている」と述べた子どもがいたが、仲良くなるのは、相手が日本に興味を持っていたり理解がある場合で、外

国人の友達の多くは、「気が楽」、「食生活や家での習慣が同じ」という理由から東洋人であった。

補習校の教師に、現地校における日本人の子どもの問題行動等を尋ねたところ、「アメリカの学校では暴力は絶対に禁物にもかかわらず、肩をつかんだり、かっときて手を出す子どもがいる。落ち着きがない子どもの場合、多動と疑われることもある。新しく入った子どもの面倒を英語ができる子どもがみさせられる場合に、人間関係がうまくいかなることがある」という話をうかがった。

音楽とスポーツ 現地校では「一人一人時間割が別々なので、友達をつくりにくい」という状況がある。子どもや保護者の話を聞いていると、それを補っているのが、バンド、オーケストラ、コーラスと分かれている音楽のクラスや体育のクラスであることがわかった。例えば、ある中学生は、「マーチング・バンドの練習自体はすごく大変だけど、メンバーの人と一緒に頑張ったり、話したりするのはとても楽しい。アメリカに来てよかったと思った時は、マーチング・バンドに入ってから、友達ができたとき。今までは日本の高校にばかり行きたいと思っていたが、バンドが楽しいので、こっちにもいたいと少し悩んでいる」と語り、高校生は、「サッカーを始めてからチームメイトの友達と仲良くなったりして、前より友達が増えた」、「オーケストラのクラスってというのは、みんなけっこう一緒にいるから、4年間単位という感じで、ずっと1つのクラスを取っていきますよね。だから友達というのが確定してくるんですよ」と語った。

音楽やスポーツは、単に友達づくりのきっかけになるだけでなく、子どもに夢とともに、自信や達成感を与えているようである。ある高校生は文集に、「私はハイ・スクールへ通い始めて3年目にして、始めて夢を実現させました。その夢とは、テキサスで最高のバンドのメンバーに選ばれたことです」と書き、オーディションにとおりコンサートが無事に終わった中学生は「僕はこんなにトランペットがうまく吹けるとは思わなかった。僕は自信をもってトランペットを吹けるようになったのである。僕はこの体験をして、一回り大きくなったような気がする」と書いている。

このような効果は保護者も強く感じているようであり、「アメリカでは授業で楽器を習わせるクラスがあり、現地の生徒と仲良くなるのによい刺激となった」、「最初、英語や英語を話す人を受け入れることができなかったようです。サッカーチームに入り、一緒にプレーすることで、体がほぐれ徐々に心もほぐれていったように思います」と述べていた。また、補習校の教師の一人も、「体育とか音楽とか毎日ブロックシステムで行うやつを取ら

ないと。旅行とかエキストラ・カリキュラムで放課後残って練習するとか、そのグループの中に、リハーサルとかコンサートとかあるために、学校以外の時間帯にその子たちに会える。友達もできるし、高校でこれをやったという達成感を味わえる」と、そのようなクラスを取ることを強く勧めていた。

とはいうものの音楽やスポーツの世界には厳しい面もある。バンドの中で1st chairになりながらも、一教科でも成績が70点未満だったら出場できないということを経験した先生から知らされ、「バンドに参加する事の重大さと厳しさを思い知らされた」中学生や、試験に合格しなければ試合にでれないという、ノーパス・ノープレイという規則を身をもって体験することにより、「学業とスポーツを両立させることにより自己管理ができるようになった」という中学生がいた。また、chair testやtryoutとよばれる選抜テストが頻繁にあるようで、あるスポーツを希望していても、テストに合格しなければPhysical Educationという一般的な体育の授業しか取れないということであった。これに関して、ある保護者は、「アメリカでは、何かの才能があるとそれを伸ばしてくれる。しかし、何かをうまく見つけることができれば大変」と教えてくれた。このように早くから英才教育に近いことが行われているので、「日本で4歳からピアノを習っていたのに、こちらで本当のエリート教育を知り自信を無くした」という高校生もいた。

ESL 最後に現地校におけるESLクラスについて報告する。ESL (English as a Second Language) は、学校によっては、ESOL (English to Speakers of Other Language) あるいは、ENES (English for Non English Speaker) と呼ばれていた。さらに、いくつかの学校では、ESLクラスの前にnewcomerのクラスがあった。また、インタビューした中で、入学した中学校では初めての日本人生徒であり、しかもESLのクラスがなかった子どもが一人いた。しかし、「ESLの教師が学校に来て1対1で指導してくれ、さらにカウンセラーやESLの先生方がとても協力的でよかった」と当時のことを振り返ってくれた。

ESLのクラスを見学したり子どもにインタビューして強く感じたことは、ESLの授業自体よりも、いつ、どのようにESLのクラスを終了するかが問題だということである。ESLのクラスに入ることに対しては、「低学年の場合はESLよりも、クラスで皆と同じ授業を多く受ける方が早く英語に慣れるのではないか」と考えている母親もいたが、現地校に入学したほとんどの子どもがESLクラスに入っている。

インタビューした子どもの多くは、学年にかかわらず、

「ESLは簡単」と答えた。ESLクラスの卒業に関しては、随時卒業させてくれる学校もあるようだが、一年に一度しか卒業の試験がない学校の方が一般的なようであった。そのような場合、本人が簡単と思っていても、一年間我慢しなくてはならない。試験はESLの教師作成のものとTAAS（Texas Assessment of Academic Skills）というテキサス州の標準学力テストとが課されることが多いようであった。

簡単だから早く出たいという子どもがいる一方で、ESLのクラスに自ら長居する子どももいる。その理由を、ある子どもは、「先生から抜けてもよいといわれたが、簡単だし、面白いから」と答え、別の子どもは「一クラス気楽なクラスが欲しかったから」と答えた。このことに関して保護者の一人から、「現地校は、英語を話せない子どもたちに対しても、そのレベルに合った教育システムができており助かる半面、子どもたちに甘くなる傾向がある。難しいことではあるが、ESLクラスを早く抜けさせるような動機づけを強化してほしい」という要望が出ていた。

ESL担当の教師に日本人の子どもについての感想を求めたところ、ある教師は、「日本人は行儀がよい、学習の構えができていて」と高く評価していた。別の教師は、「遅刻などのトラブルがあり指導がうまくいかない日本人生徒がいて、両親とも電話や電子メールで相談しているが、それは日本人特有の問題から生じているのではなく彼の個人的な問題である」と述べていた。

## 言 語

高校生が渡米した最初の頃を思い出して語ってくれた。「それで私がバイオリンできないということわかるじゃないですか。でもう恥ずかしくって、何言ってもいいかわからなくて、何言われてるかもわからなくて。ほんとに一所懸命はげましてくれるですよ、みんな。でも私が、ふざけられているのか、それもわからないんですね。ジョークでただおおげさに言ってくれているのかもしれないし、とか思って。だけど、わからないから、一人でただにこにこ笑っているだけ、という感じで」

このように最初の頃は、「言葉がわからない」ために、学校でも「指示がわからない」し、家に帰る時も、「バスでおりるところがわからない」、毎日「言いたいこと、伝えたいことが相手にすぐその場で伝わらないストレス」がたまる。「学校に来たらすぐに帰りたくなった」という子もいた。

まず、質問紙調査の結果について、簡単に報告する。調査は、小学4年生、6年生、中学1年生、3年生、そして、高校生を対象に行った。回収率は60%であった。

その中で、現地生まれの子どもを除き、さらに、未記入部分が多かった子どもを除外した。その結果、小学4年生9名、6年生9名、中学1年生8名、3年生6名、高校生9名が分析の対象となった。平均滞在年数は、いずれの学年も3年前後であった。

言語能力に関しては、日本語と英語において、話す、聞く、読む、書くことがどのくらいできるかを、よくできる、だいたいできる、あまりできない、ほとんどできないの4件法で尋ねた。そして、よくできるを4点、だいたいできるを3点、あまりできないを2点、ほとんどできないを1点として得点化し、それぞれの子どもにおいて、日本語、英語別に、話す、聞く、読む、書くの4つの平均値を求め、さらに、日本語の平均値から英語の平均値を引いた値を算出した。

その結果、全体の傾向として、滞在期間が長い子どもは日本語の平均値から英語の平均値を引いた値がマイナスになり、短い子どもはプラスになる、つまり、滞在期間が長いと日本語より英語の方が得意になることがわかった。さらに、学年別にみると、マイナスの子どもの数は、小学4年生と6年生で2名、中学1年生で3名いたが、中学3年生と高校生ではいなかった。また、英語の平均値が満点の4.0である子どもの数を調べたところ、小学4年生4名、6年生1名、中学1年生3名、3年生1名、高校生1名であり、平均滞在期間は約4年半であった。このことから、たとえ滞在期間が長くても学年が上になると年齢相応の英語能力を身につけることが難しいこと、学年が低いと英語の英語能力が身につく反面、日本語能力が低下することが読みとれる。ちなみに、平均値の差がマイナスであった小学生4名の日本語と英語の平均値は、(日本語、英語)というように表記すると、(3.5, 4.0), (2.5, 4.0), (3.5, 3.8), (3.8, 4.0)であった。

滞在期間が2年と短くても、英語の平均値が4.0の小学4年生がいたので、滞在期間が2年前後の他の小学4年生との違いを調べてみたところ、友人関係に違いがみられた。具体的には、悩みごとを相談したりする親友はどこの国の人ですか、という質問に対して、アメリカ人と答えていた。「やっぱり人とか友達とかの影響があると、言語というのは学べると思うんですね」と述べた子どもがいたが、英語能力の向上は英語を用いた友人とのコミュニケーションと関連しているようである。

最後に、インタビューの結果をまとめると、英語に関しては、「会話では問題ないが、会話と読みのボキャブラリーが違うので、読み物が大変」、日本語では、「漢字の読み書きが難しい」、「中2以降新しい漢字を覚えていない」、「どんどん新しい漢字が出てくる」、「なんか大人とかと話すとき、きれいな言葉が出てこないから困るな

あという感じかな。けっこうなれなれしくしゃべって、それで日本だと、けっこう軽蔑される時あるから」というように、漢字と敬語の学習が負担になっているようであった。

## 学 力

日常の言語能力と教科を学習するのに必要な言語能力との間を埋めてくれるのがESLクラスである。分析の対象となった41名の内、2名を除く39名がESLクラスの経験があった。現在その内の20名が平均すると約2年でESLクラスを卒業し、残りの19名がESLクラスに入っていた。先に言語のところで述べた、日本語と英語の能力に関する自己評定の平均値と標準偏差を群別に求めたところ、ESLを卒業した子どもは、日本語の平均値が3.70（標準偏差0.39）で英語の平均値が3.46（標準偏差0.51）であったのに対して、現在もESLに在籍している子どもは、日本語3.72（0.49）、英語2.53（0.82）と、英語においてのみ大きな差がみられた。

このように、主観的にも英語能力が向上しESLクラスを卒業するのであるが、「ESLは簡単だったが、普通クラスは難しい。言葉がよくわからない」というように、ESLと普通クラスの間にギャップがあるようだ。例えば、数学では、「長い文章問題が出てきたら、わからない単語とか時々ある」、「宝くじの賞金のもらいかたなどアメリカ人の常識を知らない」と問題の意味がわからない」という声があった。また、「U.S. Historyは読み物が多く大変だった」、「心理学は読書量が多く大変」というように、読書量の多さに苦労していた子どももいた。

しかし、子どもに現在受講している教科について、よくわかる、わかる、ほとんどわからない、の3段階で自己評定してもらったところ、全体では、よくわかるが63%、わかるが31%、ほとんどわからないが6%と、授業をおおむね理解しているようである。ちなみに、ほとんどわからない教科として、4人がScienceを、3人がMathとHistoryを、2人がSocial Scienceをあげていた。また、学年別に調べると、よくわかると答えた割合は、小学4年生53%、6年生57%、中学1年生60%、3年生66%、高校生79%と学年が上がるにつれて高くなっており、自分の能力にあった授業を選択する割合が増えていた。

これに対して、補習校の授業の理解度は学年とともに下がっていく。補習校の学習内容について、よくわかる、だいたいわかる、あまりわからない、ほとんどわからない、の4件法で自己評定させ、よくわかるを4点、ほとんどわからないを1点として得点化し、学年別に平均値を求めた。その結果、国語では、小学4年生3.56、6年

生3.56、中学1年生3.38、3年生3.33、高校生2.86、算数・数学では、小学4年生3.78、6年生3.06、中学1年生3.00、3年生3.00、高校生2.71と学年が上がるにつれて理解度が減少する傾向にあった。

最後に、学習活動に関して、子どもや保護者が渡米することにより変化したと感じていることをまとめておく。ある子どもは、「プロジェクトの発表を自ら進んで行うようになった。放課後すぐ家に帰るので、日本にいた時に比べて自宅にいる時間が増え、勉強時間も増え、勉強する習慣が身についた」と語っていた。また保護者側には、「教育制度の違いからか、子どもを他の子どもと比べてみるのが少なくなったように思う。相対的でなく絶対的な価値で認めてあげられるようになった」、「日本では、できて当然なのができなかったというように減点法で見ていたが、こちらでは、できなくて当然なのがつてきたという風に加点法でとらえるようになった」という変化があった。

## アイデンティティ

外面から内面へ まず、いくつかの感想を学年順に並べてみる。

小学2年生（日本に一時帰国したときの感想）：「日本の家がこびとがすむような家に見えました。こんな小さなところにすんでいたのかと思うほど日本は小さな国でした。なにもかも小さくみえて、人間がおりのように小さく、せまいところをいったりきたりしているようでした。だけど歩いて買いものにいけるしとてもべんりです。いいところもよくないところも国によってちがいます。日本をはなれてはじめて、新しいことをはっけんできました」

小学3年生：「日本にいたら、日本はいいと、思わなかった。だけど、アメリカに来たから、日本でいいなあと思える。だからアメリカに来てよかったと思う」

小学4年生：「今はアメリカに来てよかったと思っています。どうしてかという、日本にいたらアメリカ人やかん国人や中国人やいろいろな国の友達はできなかったし、アメリカと日本のちがいもよくわからなかったと思うからです」

小学6年生：「日本で過ごしていた頃は分らなかつた違いにここに来てから気づくようになりました。初めはいい面しか見えなかったのですが、何年か経つうちに、悪い面も見えてきました。私は両方の良い面を自分の中に取り入れていきたいと思っています」

高校1年生：「自分のことをよく考えるようになった。その結果、アメリカ的な考え方になった。こういう生活しないとなじめないというのが体でわかっていく。（中

略)日本が、人間的に狭く、人生をなげている若者が多いちっぽけな国だと思えるようになった。もっと自分がオープンになれば、もっと他の人と親しくできるかなって。日本のいいところとアメリカのいいところを見習いたい」

高校2年生:「最初は自分がなんだかわからなかったんだけど、日本人でもないし、アメリカ人でもないし、何ですかと言われたら、まあ、やっぱりジャパニーズ・アメリカンとしかいえないからね。だけど最近、このinbetweenにいるのが楽しくなって。二つのknowledgeをもって、それを生かす方法を見つけたから」

高校3年生:「小学校から中学校まで僕はアメリカ人と呼ばれた。英語が話せて日本語が分からなかったからです。高校生になり\*\*先生の小論文のおかげでクラスみんなに僕は日本人だと証明した。友達の\*\*君や\*\*君に助けってもらって、すばらしい文を書くことが出来た。僕は少しずつ漢字を入れて、みんなから日本人とみられた。アメリカ人より日本人と思われる方がいいけど、けっこう苦労した。(中略)今、考えると補習校を続けられたのは僕が日本人だと証明する為だった。アメリカで住ごすと決めただけ心の中はいつも日本人として生きていきます」

このように学年順に感想をみていくと、次のような変化を読み取ることができる。小学校の低学年でも日本とアメリカを比較し、それぞれの長所や短所を感じている。しかしそれらは外面的なもので自己の内面には向かっていない。ところが、高学年になると、「両方の良い面を自分の中に取り入れていきたい」というように変化し、さらに高校生になると、「自分のことをよく考えるように」なる。そして、「自分がなんだかわからない」状態から、アイデンティティを確立していく。ある子どもにとっては、「日本人だと証明」し自己を定義することが、アイデンティティを確立する鍵となったのである。

他者・集団における自己 小学生の間は、「物がいいし食べ物おいしいから、日本人でよかった」「スタイルがいいからアメリカ人になりたい」「土地が広いし、みんなやさしいから、アメリカに住みたい」というように、外面的なものにより判断をする。ところが思春期になると、他者が自分をどうみているかが気になり、自分の言動に対する他者の反応を手がかりにして、自分というものを形成していく。また、「日本人は気をを使うけど、アメリカ人には自己中心的な人が多く、たまに嫌になる時がある。そんなとき、日本人でよかったと思う」というように、所属する集団の中に自分を位置づけるようになる。このような観点からアメリカにおける日本人の子どものアイデンティティ形成を考えると、他者として日本人だけでなく外国人が含まれるという点において、日

本国内だけで発達する場合と大きく異なる。

「アメリカ人は恥じらいを気にしないので、自分のいたいことを何でもいう。相手のことを気にしない。僕はアメリカ人じゃないから、アメリカ人の生活、態度、習慣、そういうことができないんですよ。日本人の親に生まれて、アメリカに来て日が経ってないですから、そんなに簡単には変えられないと思います。なるべくアメリカの生活に合わせようとしています」。この子どもは、アメリカに合わせようと思いつつも、変えられない部分に日本人としての自分をみているようである。

また、日本人同士の関係も、周囲に外国人がいると変化し、その中で日本人であることを改めて意識する子どももいる。「現地校が一緒になるまでは、けっこうしゃべっていたんですけど、現地校が一緒になると、挨拶しても無視されたし、日本語でしゃべりかけんなーという感じで。日本語で話すことがなんか恥しいらしくて。でも私やっぱ日本人だから、日本人同士で英語ってなんか考えられなくて、どうしても日本語で話しかけちゃったら嫌われちゃいました」

さらに同じ日本人同士でも、アメリカ生まれの子どもと日本から来たばかりの子どもとは合わないことが多いという。「たぶん、こっちにいる子と日本から来た子というのは、全然考え方が違うんですよね、やっぱり。こっちでずっと育っている子は、中味はアメリカ人で、ただ血が日本人というだけで、それだから、その間に分裂というか線が、ラインができちゃうんですよ。そちらにとっては、日本から来たばかりの子たちは、やっぱり好きじゃないんですよ。で、日本から来たばかりの子にとっても、永住の人は、アメリカ人だから、話す内容もわからないし、言語もやっぱり、あんまり通じないしという、そういうので、たぶん、お互い英語もうまくならないし、日本語もうまくならない、というので、いたと思うんですよ」

二つの文化のバランス このように、アメリカに来て最初のうちは、日本とアメリカをどちらかといえば対立したものと考え、その中で、日本人であることをより強く意識する子どももいれば、積極的にアメリカ的になると、かなり両者のバランスがとれるようであるが、「感覚とかが違って、あらいところがあるじゃないですか、アメリカ人、そういうとこでちょっと違うから、納得いかない部分が多いから、日本の方が自分にやっぱ合っていると思います」、「アメリカ人とはなじめない」というように、感覚的なギャップはなかなか埋まらないようである。

その中でも特に、笑いの質の違いについて多くの子ども

もが語ったことが印象的であった。「あいそ笑いをしない」、「ジョークの幅が違う」、「日本人のユーモアなの、それを本気で取っちゃうから、センスが違うの、ユーモアの」、「一番あれだったのは、冗談とかいっても、すごい、なんかなんか話が合わないのね。なんだあいつら、みたいな感じで終わっちゃうのよね。会話が。それで傷ついたりしちゃうんだよね。傷ついたり、わかんなかったり、ばかすぎて」、「楽しいのは補習校。笑いのツボが一緒だ」、というように、笑いは人間関係の中で重要な役割を担っているようである。

またアメリカでは常に自分の意見を求められるということも、アイデンティティの形成に影響していると考えられる。「日本はみんな一緒、アメリカでは君は君、私は私」、「日本にいたときは、みんながやるようになっていけばいいと思ったんですけど、こっちにきて、必ず何か、いつも意見を持つようにしてますね」というように「自分のことを表現しないと生きていけない」という状況では、常に自分を意識せざるをえないであろう。

**親子関係** アイデンティティの形成に関連する要因として、親子関係の変化も見過ごすことはできない。多くの子どもや保護者が、日本にいた時に比べて「家族と過ごす時間が増えた」、「家族の絆が強まった」、「家族全員が仲良くなった」と感じている。そのような中で、「アメリカの生活習慣で楽しみなものはすぐ真似してしまって、その中には、日本に帰った場合、日本人としてはちょっとどうかな、と思われることもあります。その様な時も、その場で注意します」、「日本人として日本を理解しやすい手助けとなるような方針のものがあるとよい。根本的なところで、日本人として日本を大切に誇りに思う子どもたちが育つとよい」というように親が考えている場合は、子どもに日本人としてのアイデンティティを持つように働きかけているであろう。

また、子どもの言語能力が保護者よりも高くなった場合、親としては、「ささいな事で時々子どもに相手は何をいったか聞き返すことがあり、親としても立場がないと感じることがある」、「立場が逆転したように感じる事がある」。子どもも「両親を見下してしまう」。このような立場の逆転がアイデンティティの形成にどのような影響を与えるかは、子どもの年齢により大きく変化すると考えられるが、今回の調査ではそのような分析を行えるだけの十分な資料を得ることができなかったため、今後の課題としたい。

## おわりに

「日本は運動会を通して団結力を学び、アメリカは個人の能力を引き伸ばす」と両国の特徴をとらえた子ども

がいた。このように特徴を対比させると、二つの国を理解したような気になる。筆者も、補習校で習字の授業を見学した時に、お手本に近づくことが目標で、うまく真似ると評価されるが自分で創作しても評価されない、という学校教育における習字の仕組みを極めて日本的だと思った。

しかし、学校や家庭を訪問し、個々の子ども、教師、保護者の声を聞くと、補習校に求めるものが子どもや親によって異なり、現地校でも子どものおかれている状況は一人一人違い、教師の指導方法も様々であった。また、言語や学力、アイデンティティも、滞在期間や友人関係、親子関係など多くの要因の影響を受けていることが明らかになってきた。したがって、ダラス日本語補習授業校に通う子どもに限ったとしても、一般的な結論を導くことは難しい。そこで、今後は、ある時点における状態を比較するのではなく、時間にもなう状態の変化に着目し、そのプロセスに何らかの特徴を探っていくことが必要になると感じた。

たとえば、二つの文化を統合したり使い分けたりする場合に、意識的にやろうとしてもできないこともある。「ものを落としますよね。日本語で何て言うか忘れちゃったんですよ。来たときには、たぶん、おとっととか、あつ、とか言っていたと思うんですけど、みんなウップスといいますよね。絶対言えないな、と思ったんです。その言葉が。でも一回言えるようになってくると、それがくせになっちゃって、もうそれは日本語では言えなくなっちゃって」。このように、英語では絶対言えないと思っていても、言えないどころか、逆に日本語を忘れてしまったりする。

環境が変わると、人間は環境に合わせて自分を変えようとする。それと同時に、これまでの自分を保とうとする。今後の課題は、変化した後の状態、保ち続けている状態に焦点を当てるのではなく、変化や保持のプロセスを明らかにすることである。そうすることにより、どのようにすれば子どもの異文化適応を援助できるかが具体的にできるであろう。

## (附記)

本調査にご協力頂きました多くの方々に記して感謝の意を申し上げます。

(1999年9月16日 受稿)